

# 図書館だより



図書館だより 2022 第 1 号  
2022 年 5 月 31 日発行  
名寄市立大学図書館運営委員会  
名寄市立大学図書館  
〒096-8641  
名寄市西 4 条北 8 丁目 1 番地



## 巻 頭 言

名寄市立大学図書館  
館 長 堀川 真



### - 本が紙であること、本を読むということ -

絵本の仕事をしていると、ときどき人からこんな話をされます。  
「絵本にはもっと可能性があると思うんですよ」うんうん。  
「電子書籍にして音や動きをつけるとか」うーん…。

本から与えられるものが内容にある情報だけだととらえれば、その意見もありかと思えます。ましてや伝えたい音楽などがあつたなら、ポチッと押せば情報も増し増しです。今日においてマルチメディアの存在は否定されるべきものではありません。電子書籍を楽しむスマートフォンやタブレット PC は広く普及し、調べ物をする際に一度ならずネットを利用するのは普通のことになりました。では、私は何に引っかかっているのか。

授業のうちで保育を学ぶ学生に「絵本が紙であることの意味とは何か」と問いかけたことがあります。回答には、電気がいらぬ、どこにでも持ち運べる、いつでも読めるなどがありましたが、私はある意見に強く引きつけられました。それは、「折れる」です。具体的に言うと、「次のページが半分見えるように折って楽しんだ」という本に対する行為なのですが、そんな読み方があつたのかと驚きました。

実はそのとき学生らに対して、知人の子育てにかかわる絵本のエピソードを用意していました。それは、「うちの子にはお気に入りの一冊がある。内容や色や形ではなく、噛み心地のいい絵本というのがあって、いつもそれをよこせとせがんで来ては噛んでいる」というものです。スマホやタブレット PC にその「噛み心地」というものがあるのでしょうか。内容以前に紙の本にはそういう視点もあるんだよという変化球だったのですが、折るという回答には読書に対する主体的な行為というものが見て取れました。そして、もうひとつ気づかされたのが読書の痕跡です。折られた本には、この本はあるとき、こういう風に読まれたのだという情報が上書きされたのです。折られた本は、その思いとともにあって元には戻りません。

ネットで見たニュースをもう一度読もうとして、たどり着けなかったという経験はありませんか？電子書籍の運営会社が事業停止して、購入した電子ブックが読めなくなったというトラブルを聞いたことはありませんか？そんなことを通したあるとき、私は手に持っていた本の重さを確かめつつ、本は逃げないなあと感慨深く思いました。ものとしてそうなのですが、情報としても、です。何かの都合で発信者が中身を書き換えたいと思ったとしても、なかったことにしたいとしても、それは不可能です。ここにあるのだという強さが迫ってきました。

あるとき A 市の市議会で「読むと危険な思想を持つかもしれない寄贈本を開架においていいのか」と図書館の管理者に質問した市議がありました。そのやりとりを聞きつけてネットにあつた録画を見ていた私は、まあ開架に移しますと回答して終わるんだらうなあと思っていたのですが、管理者は「図書館法」（1950 年）と「図書館の自由に関する宣言」（1954 年）を論拠に、議論のある本でも開架に置き続けると宣言したのでした。図書館の関係者にとってはあたりまえのことなのかもしれませんが、それは政治のごり押しに慣れきつていたあの頃の私にとって衝撃の出来事でした。

読書の自由とは私たちにとってあまり関係のない、遠い出来事でしょうか。決してそうではありません。「読んではいけない本がある」と思ってそれに近づかないということは、憲法でいう内心の自由が保障されていない状態なのだといえるでしょう。読みたい本を読む、という行為が議論されている市議会の録画を見ながら、これは何が起きているんだらうということを一言で言い表そうとしたとき、それは私の中で「民主主義」という言葉に結実しました。読みたい本を読むという行為は、民主主義につながっている。子どもに絵本を読み聞かせるとき、読まなければいけない本があるわけでもなく、読んではいけない本があるわけでもない。例えばロングセラー絵本は、ときに大人から良く思われなかったとしても、子どもがおもしろいといって読み継いできた絵本たちです。そんな草の根の保障が生きている世界のあり方に、私はじんわりと感動するのです。

東日本大震災直後の頃、ワークショップのために訪れていた道南の今金町にて、津波の被害を受けた岩手県山田町のボランティア報告写真展を見ました。そこには失われた昨日を思って途方にくれるしかない光景が生々しくあつて呆然とせざるを得なかったのですが、ある一枚に強烈に引きつけられました。それは、電気もまもなく日中の屋外にて、絵本の読み聞かせに集中する子どもたちの風景です。そこには確かに希望といふべきものがありました。大人が引き受けなければならないことのひとつに、子どもたちの明日の保障があるでしょう。絵本の一点に子どもの目線が集中するその写真を見たときの気持ちを整理すれば、何かを知ろうとする人に明日を見ていたのだらうと思います。

どうぞ本学図書館で読みたい本を読み、知りたいことを調べてください。図書館職員一同、みなさんの明日をつくるためのお手伝いをしたいと思っています。

### 堀川 真 館長 プロフィール

堀川 真 (名寄市立大学図書館長 社会保育学科教授)

1964 年北海道紋別市生まれ。絵本作家。弘前で農学を、旭川で美術と木工を学ぶ。主な絵本に「あかいじどうしゃ よんまるさん」(福音館書店)、「北海道わくわく地図えほん」(北海道新聞社)、「もりのやきゅうちーむ ふあいたーず」(北海道日本ハムファイターズ選手会作/北海道新聞社) などがある。

◎堀川館長の作品は当館にも所蔵があります。  
いずれも貸出可能ですので、是非ご利用ください。



名寄市図書納入組合様より、2021年度も図書カードを当館に寄付していただきました。いただいた図書カードは、卒業生ベストリーダー(4年間に最も多くの図書を借りた人)各学科1名、計4名に贈呈しましたので報告いたします。

**ベストリーダー受賞 おめでとうございます**

社会保育学科	佐々木星奈さん	490冊
社会福祉学科	小関千那代さん	477冊
栄養学科	長谷川 鈴さん	475冊
看護学科	倉林 稚恵さん	425冊



※大学同窓会からの図書カード寄贈は2020年度分をもって終了しました。

## 展示のお知らせ

一般社団法人 家の光協会主催「第28回世界こども図画コンテスト」の入選作品展を、6月1日より当館で実施いたします。この機会に皆様是非ご観覧ください。

なお、展示期間中は開架2階入口付近及び南側に展示用パネルを設置するとともに、2階南側窓のロールスクリーンが常時下がった状態となりますのでご了承ください。



「世界こども図画コンテスト」は、1954年に雑誌「家の光」創刊30周年記念事業の一つとして開催された「世界のお友達との交換図画」から始まり、2021年で第29回目となる世界規模のコンテストです。

世界の子供達に自然や農業の大切さに気付いてもらうとともに、友好・親善と豊かな人間性を育むことを目的としており、世界45カ国の子供達が心のままに描いた作品からは、その国や地域の生活・文化も伝わってきます。

**展示期間：2022年6月1日(水)～2022年6月25日(土)**

**展示場所：名寄市立大学図書館 開架2階**

※学外の方は入館の際に「図書館利用簿」へのご記入をお願いいたします。

また、web「家の光公募サイト」では過去数年の入選作品集が公開されており、ブラウザ上で閲覧が可能です。

◎入選作品集掲載 web ページ◎

「入選作品：家の光公募サイト」

<https://www.ienohikari-koubo.com/zugacon/history/>



## 短冊設置のお知らせ ～なよろ市立天文台「七夕観望会」～

なよろ市立天文台「きたすばる」では、夏の夜空を観望したり、七夕をテーマにしたプラネタリウム上映や絵本読み聞かせなどを行う「七夕観望会」のイベントが例年七夕の時期に開催されています。

この度、イベント期間中に天文台に展示される七夕飾りの短冊を、当館利用者の皆様にもご記入いただきたいとの依頼を受け、当館開架2階及び3階の消毒ブースに短冊を設置いたします。来館の際に星への願いをしたためてみてはいかがでしょうか。

短冊設置期間：2022年6月9日(木)～2022年7月8日(金)

※短冊記入の際は、空間が密にならないよう距離を取ってご利用ください。

短冊飾出し期間：2022年7月9日(土)～2022年7月10日(日) 各日13:00～17:00頃

短冊飾出し場所：なよろ市立天文台「きたすばる」名寄市日進147-157-1

天文台敷地内の屋外にて展示予定 ※悪天候や強風の場合は室内にて展示



## 推薦図書コーナー

『同志少女よ、敵を撃て』逢坂冬馬著、早川書房

予言しましょう、この作品はそのうち美少女アニメになる！作中、キャラの立った複数の少女が兵士として登場するのですが、カバーイラストに引っぱられてか、もう全員美少女としてしか浮かばない。とあって、アニメ「ガールズ&パンツァー」みたいなほのぼのとしたお話ではありません。ソ連国民のうち2000万人が犠牲になったという独ソ戦が舞台の苛烈な物語です。

先日、学生から「歴史を学ぶ意味がわかりません、昔のことだし」と言われて考え込んでしまいました。教科書が嫌いなのはそれとして、そんな人に届く良質なフィクションに人間のダメさを知る同じ力があるのではないかと感じるどころです。悲劇は立場をかえて、今日もくり返されています。独ソ戦についてもっと知りたいならば「独ソ戦」(大木毅/岩波新書)、女性兵士の心情をもっと知りたいならば「戦争は女の顔をしていない」(スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ/岩波現代文庫)がおすすめです。後者はマンガにもなっています(小梅けいと画/KADOKAWA/既刊3巻)。

(館長 堀川 真)

<図書館2階開架にも所蔵があります 請求記号：913.6/O>



『コンテイジョン』スコット・Z・バーンズ脚本、スティーブン・ソダーバーグ監督、マット・デイモン [ほか出演]、ワーナー・ホーム・ビデオ

スティーブン・ソダーバーグ監督による映画『コンテイジョン』(2011年公開)は、インフルエンザの世界規模のパンデミックを描いたアメリカ映画。都市のロックアウト、クラスターの発生、食料・日用品の買い占め、拡散するウイルスへの恐怖、米国疾病対策センター(CDC)や世界保健機構(WHO)の活動、ワクチン開発をめぐる諸問題。

まるで今日の新型コロナウイルスの世界的流行を予見するような映画。保健福祉を学ぶ学生必見。

(教養教育部教授 小古間甚一)

<図書館2階開架にも所蔵があります 請求記号：視聴覚D7-196>

